

コラム 2005年 前期

1 花粉症について

2 予防医学としての鍼・灸（経絡治療）

3 温穂堂 名称の由来

花粉症について

今年の花粉の量は、去年の30倍 80倍ともいわれています。花粉症の方にとっては、この数字を聞いただけでもう症状が強くなっているかもしれません。どうしたら軽くすごせるのでしょうか。そして花粉症を治せるのでしょうか。アレルギー症にたいして一般的にいえることですが、生活習慣に問題点があるといえます。

私たちの生活は、夏涼しく冬暖かく、しかも一年中つめたい飲み物を飲んでいます。つまり、厳しい環境の中にはおらず、体が四季毎に強く対処しなくてすんでいます。

このことは、強いストレスに会わないため、副交感神経優位の状態になっていることを意味します。つまり、過敏に反応を起こす状態を作っています。さらに、冷たい飲み物の多飲は体を冷やし、免疫力を下げてしまいます。

生活習慣を改め、経絡治療により免疫力を引き上げ、今年の花粉の時期を一緒に乗り越えて行きましょう。

予防医学としての鍼・灸（経絡治療）

予防医学の大切さが説かれて久しいですが、今日、定期健診等の実施で大きな成果をあげていると言えます。しかし、私自身鍼灸の仕事に携わっていて、

いつも疑問に思うことがあります。

それは、当院に来られる患者さんの中に、具合が悪いのに検査を受けても「異常なし」と言われ、あまり治療を受けられない人が多いと言う事です。それはどうしてなのでしょう。

私の治療例から、次のような方が居られましたので、参考にあげてみます。中学2年生の女子生徒。毎朝学校に行く時間になると、お腹が痛み、強い嘔吐感を感じます。そのため、しばしば学校を休むことになりました。心配になり、内科を受信。

検査するも異常なく、「気のせいだよ」と言われたとか。それでも、症状は続き苦しいため、紹介を受けて当院に来られました。早速脈・腹診。お腹はカチカチに硬く、胃の上を軽く押すと苦痛に顔をゆがめます。明らかに変調をきたしています。

この方は、治療の結果症状はなくなり、元気になりました。ここで『予防』と言う意味合いから、考えて見ましょう。東洋医学には『未病を治す』と言う言葉があります。病になっていないものを、どうして治せるのか？と言われるかも知れませぬ。そうかも知れませぬ。現代医学的見方であれば。しかし、そうではないのです。

東洋医学では、体は次の「五つの系統」によって作られ、支配されていると考えます。つまり、「肝臓系統(肝臓・胆嚢)」「心臓系統(心臓・小腸)」「脾臓系統(脾臓・胃)」「肺臓系統(肺・大腸)」「腎臓系統(腎臓・膀胱)」です。但し、脾臓は、現代医学で言う脾臓とは違います。これらの「五つの系統」が、バランスを保って、病にならぬように体を守っていると考えます。ですから、この系統のアンバランスは、病を引き起こしていくと考えられます。特にバランスを崩している「系統」の支配領域に、病的な反応が現れてきます。

私たち経絡治療家は、このアンバランスの状態を脈診・腹診等で見極め、鍼灸によってバランスのとれた状態に戻し、治癒させていきます。この意味で「病に至る前に、事前にその変調を見極めて、治してしまう」と言うことになります。

ですから『予防』と言うことから考えますと、変調を取り去ると同時に、「どこの変調」か、生活習慣の指導等、アドバイスすることにより、さらに病に至るのを防ぐことになります。「未病を治す」と言う東洋医学、なかんずく経絡治療を受けることによって、ご自分の体の状態を知り、健康を維持することも大切ではないでしょうか。

温穂堂 名称の由来

温穂堂とは、古代中国、元の時代（日本では鎌倉時代）にあった、漢方医学の四大学派のひとつ、「温補派」から取ったものです。その当時、大きく二つに分けられ、一つは、強い薬を用い、吐かせたり、汗をかかせたりで強制的に病を治そうとする学派。もうひとつは、温和な薬を用い、体の中を暖めながら治していく学派です。後者に、「温補派」が属します。

この名前からもイメージされるように、温和な刺激で、劇的に治癒させると言うよりも、体の芯から温め、じっくり治して行こうとするものです。この考え方が、私の目指す治療方針に合致し、さらに、経絡治療のイメージとも合うために、「温穂堂」と付けました。

つまり、慢性病になればなるほど体は冷え、また、多くの病が『冷え』によって引き起こされています。ですから、体の芯から温めて行く必要があるのです。

『経絡治療』はまさに、微鍼を用いて、痛みを与えず、体の芯から温め、免疫力を引き上げて病を治していくものですから、「温補派」に通じるころがあるのです。私もこの「温補派」の精神を引き継ぎつつ、少しでも苦しんでおられる方々の、お役に立ちたいと願っております。

ちなみに、私の妻は「温子」ですが、たまたま一致したものです。妻を知っている方々からは、妻の壺字を取ったのではと、言われましたが、少しはあるかも知れませんね。